



タイトル Title	兵庫県教育会による「皇軍慰問支那満鮮旅行」に関する研究(A Study on the Trips to China, Manchuria and Korea for Encouragement Japanese Soldiers, taken by Hyogo Educational Association)
著者 Author(s)	宋, 安寧
掲載誌・巻号・ページ Citation	神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,2(1):67-79
刊行日 Issue date	2008-09
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81000809
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81000809">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81000809</a>

## 兵庫県教育会による「皇軍慰問支那満鮮旅行」に関する研究

### A Study on the Trips to China, Manchuria and Korea for Encouragement Japanese Soldiers, taken by Hyogo Educational Association

宋 安寧\*  
Anning SONG \*

**要約：**本論文は、1938（昭和13）年から1940（昭和15）年における兵庫県教育会が実施した「皇軍慰問支那満鮮旅行」の実態を明らかにするとともに、その旅行の成果と限界を考察することを課題としている。

「皇軍慰問支那満鮮旅行」は、軍や文部省から制限を受けていたが、兵庫県教育会は準備段階において、すべて軍の要求にしたがって行ったため、「皇軍慰問支那満鮮旅行」を実現することができた。「皇軍慰問支那満鮮旅行」の目的は、慰問を行うとともに「興亜教育」のため、中国大陸を認識することであった。1938（昭和13）年と1939（昭和14）年の慰問先をみると、日中戦争の戦地であった「北支中支」が中心であったが、戦争の激化にともない、軍の要求にしたがって満洲駐屯軍慰問へと変更された。

「皇軍慰問支那満鮮旅行」は、銃後と前線をつなぐ媒介的な役割を果たしたが、その一方で商品化された慰問袋や、印刷あるいは決まり文句ばかりの慰問文が兵士たちに届けられ、旅行記に記録されたような慰問効果を十分に果たすことができたとは言えない。また教員たちが慰問旅行をとおして、軍は子どもたちの慰問文の中に中国人を憎む記述が多いことを、宣撫工作の支障になるとして憂慮していた情報を日本に持ち帰り、慰問文の改善を訴えたが、それはあくまで軍の宣撫工作の一環という限界を持っていた。

#### I はじめに

戦前日本人によって植民地や占領地へ「支那満鮮旅行」<sup>1</sup>と呼ばれた旅行が行われ、それは日露戦争直後の1906年（明治39）から始まり、1940年代まではほぼ半世紀にわたって持続された。その旅行の種類をみると、修学旅行、視察旅行、研修旅行、観光旅行があり、実施団体別にみると、学校、外務省、教育会、新聞社、保険会社、旅行会社、鉄道局に分けられ、多様な形で実施されていた。

「支那満鮮旅行」は近年多様な視点から注目されており、多くの研究成果が出されている<sup>2</sup>。しかしその多くは、学生を対象とした「支那満鮮修学旅行」に関する研究であり、教員を対象とした「支那満鮮旅行」を本格的に考察した研究は皆無に近い。教員という職業的性格からみると、修学旅行や一般市民の観光旅行とは異なり、旅行の見聞を次世代の子どもに伝えるという点で、その影響力が大きかったと考えられ、取り扱うべき対象であると考えられる。

教員の「支那満鮮旅行」は、外務省、帝国教育会、地方教育会、新聞社、民間会社などさまざまな団体によって実施されたが、そのなかでも最も力を注いだのは府県教育会であった。しかしこれまで地方教育会に関する研究の蓄積は多いが<sup>3</sup>、その事業の一つであ

た「支那満鮮旅行」を詳細に検討したものはみられない。

本論文は、兵庫県教育会が主催した「支那満鮮旅行」に注目する。その理由は、兵庫県教育会による「支那満鮮旅行」が連続して実施されたからである。昭和初期になると、地方教育会が本格的に教員の「支那満鮮旅行」事業に着手しはじめたが、管見の調査のかぎり、兵庫県教育会のように1928（昭和3）年から1940（昭和15）年まで中断することなく、毎年1回ずつ「支那満鮮旅行」を続けた府県はなかった。このように、兵庫県教育会主催による「支那満鮮旅行」は、「支那満鮮旅行」の変遷を探るうえで好個の事例であるといえよう。

兵庫県教育会が「支那満鮮旅行」にはじめて関わったのは、1906（明治39）年の文部省と陸軍省によって主催された「支那満鮮旅行」であった<sup>4</sup>。1928（昭和3）年になると、中国に関する「教育者ノ知見ヲ拡充スル」<sup>5</sup>という趣旨をもって、教員の「支那満鮮旅行」事業に本格的に着手するようになった<sup>6</sup>。その後、主催趣旨は「満洲国」成立後になると、「満洲国」に関する知見へと変化し、さらに1937（昭和12）年の日中戦争勃発後になると、「十数年来年々継続してきた海外視察団の派遣を支那事変勃発以来、皇軍慰問使派遣に変更し、視察は副次的」<sup>7</sup>となり、「支那満鮮旅行」の性格が「皇軍慰問支那満鮮旅行」へと移り変わった。

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所

(2008年4月1日 受付)  
(2008年9月1日 受理)

本稿では、兵庫県教育会が主催した「支那満鮮旅行」のなかでも、旅行の性格が大きく転換した日中戦争勃発後の1938（昭和13）年、1939（昭和14）年、1940（昭和15）年に行われた「皇軍慰問支那満鮮旅行」（以下、「慰問旅行」と略す）に注目し、その実施経緯や実態、および慰問旅行の成果と限界を明らかにすることを目的とする。

## II 実施経緯および趣旨

1937（昭和12）年の日中戦争勃発後、婦人会や議員、芸能界など各団体による慰問旅行が盛んに行われるようになった。教育界では、「各地で開かれる教育会議において『皇軍慰問を派遣する件』の決議や建議が殆どと例外なく行われ」<sup>8</sup>、各府県の教育関係者が積極的に慰問旅行を企画した。しかし軍は、慰問団体の対応によって生じる軍務的な支障を考慮し、1938（昭和13）年の春から制限を加える方針を出した<sup>9</sup>。さらに同年11月、文部省は「軍務上非常に多忙を極めていて出来るだけ他の事に力をそがれないようにと努めている……慰問団などが行くこれに應對しなければならず、自然軍務支障を起すことになるので、或る時期までは慰問団は遠慮してもらいたい」という軍の意志を受け、「是非必要だと認める以外のものは許されない」という方針を出し、慰問旅行への制限がますます厳しくなった<sup>10</sup>。

さらに1940（昭和15）年5月、外務省は「邦人渡支旅行禁止」の方針を出し、「新支那建設に直接かつ積極的に協力し得るものの外一般視察旅行者の渡支はこれを差止」められ、中国への渡航を制限するようになったのである<sup>11</sup>。

このように国側は、慰問旅行を奨励したのではなく、むしろそれを制限しようとした。このような状況のなかで、兵庫県教育会は1938（昭和13）年、1939（昭和14）年、1940（昭和15）年にわたって、3回の慰問旅行を実施した。それはどのように企画され、実現にいたったのであろうか。

### 1 実施経緯

まず1938（昭和13）年の企画をみてみよう。兵庫県教育会は、1938（昭和13）年の活動計画案の中に「皇軍将士慰問使の派遣」の項目を挙げ、「五月頃北支又は江南地方に於ける皇軍将士慰問を兼ねたる教育視察団を組織派遣」との計画を立てた<sup>12</sup>。しかし同年には軍の制限により、「許可に関し各府県や各教育団体等から文部当局に対し交渉を試みるものが少なくないが多くは不許可となるようである」<sup>13</sup>とあるように、多くの府県が出した申請がとらなかつた。そのような状況下であったにもかかわらず、兵庫県教育会は「師団司令部にも屢々出向いて懇談した」結果、ようやく許可されるに至り、1回目の慰問旅行が実施された<sup>14</sup>。

1939（昭和14）年になると、軍は慰問旅行に対する制限を緩和した。その理由は不明であるが、慰問品や慰問文が兵士に歓迎され、兵士を撮影した写真が家族への土産として喜ばれた<sup>15</sup>という慰問の成果を考慮した、あるいは国民が強く慰問を希望した経緯を考慮したなどの理由が推測される。その結果、教育界、政界、実業界、芸能界など<sup>16</sup>、各団体による慰問旅行が盛んに行われるようになった。そのなかで兵庫県教育会は、2回目の慰問旅行を実施し、「教員は必ず

一度は戦地に行つて来ることにしたい。それでないと慰問もできねば児童にも大陸を認識させることも困難であると信ずる」<sup>17</sup>とあるように、子どもの大陸認識形成にとって、慰問旅行が重要であることを強調し、教員の参加を呼びかけた。さらに「女教員諸氏ノ奮発ヲ希望」<sup>18</sup>するとして、従来の旅行にはみられなかつた女性教員の参加を勧誘した。その結果、派遣人数が前年度よりも7名も増加し、計10名の教員による慰問旅行が実現した。

1940（昭和15）年にいたると、兵庫県教育会は前年度と同様に慰問旅行の計画を立て、人選を行い、各種の準備を進めていたが、前述の外務省の「邦人渡支旅行禁止」の方針により、北支中支への慰問旅行が不許可になった。しかしながら兵庫県教育会は計画を中止するのではなく、軍の要求に従い、慰問先を軍の要求にしたがいがい、満洲駐屯軍へと変更し、慰問旅行を実現したのである<sup>19</sup>。

では慰問旅行への制限が厳しい時期があつたにもかかわらず、なぜ兵庫県教育会が企画を継続して実現することができたのだろうか。その理由は「皇軍慰問の計画に関しては軍当局並びに県当局の許可を得其の指図」<sup>20</sup>を受けながら、準備が進められてきたためであつた。実施にいたるまで、兵庫県教育会はさまざまな準備をしており、その詳細は表1のとおりであつた。

表1 兵庫県教育会による「皇軍慰問支那満鮮旅行」準備事項一覧

年度	皇軍慰問の実施過程と準備事項
1938 (昭和13) 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1937（昭和12）年11月28日「本会創立五十年を迎ふる時局対策昭和十三年の本会活動計画案」の第11条に「皇軍将士慰問使の派遣、昭和13年5月頃北支又は江南地方に於ける皇軍将士慰問を兼ねたる教育視察団を組織派遣の計画」が記された。</li> <li>・1938年2月1日第47回理事会で、出征将士慰問使派遣の計画に関する件が検討され、5月前後に北中支地方に皇軍将士慰問を兼ねた日支親善教育使節団を組織し派遣すると決めた。</li> <li>・春頃から軍は、皇軍慰問を許可しない方針を出した。</li> <li>・軍と話し合いをした。</li> <li>・慰問品を準備した。</li> </ul>
1939 (昭和14) 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1938（昭和13）年12月3日の第36回代議員会および教育大会で「昭和十四年の本会事業計画案」の中に、皇軍慰問使の派遣は、「中支及北支へ各十名を以て組織し教育視察を兼ねしむ」と計画された。</li> <li>・3月9日第57回理事会で皇軍慰問旅行団派遣の諸件につき協議を行った。</li> <li>・4月号の『兵庫教育』の巻頭に「皇軍慰問団ノ参加者募集」を掲載した。</li> <li>・5月1日第61回理事会で皇軍慰問使詮衡した結果、10名と決めた。</li> <li>・5月25日県当局の訓示を受け、湊川神社に参拝した。</li> <li>・慰問品を準備した。</li> <li>・旅行の手續などを行った。</li> </ul>
1940 (昭和15) 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月12日第77回理事会で、皇軍慰問大陸視察団派遣に関する件を検討した。</li> <li>・4月23日第78回理事会で、皇軍慰問大陸視察に関する人選を協議し、10名と決めた。朝鮮満洲を経て北支より中支の皇軍を慰問且つ学事の視察を行うことに決めた。</li> <li>・5月7日外務省は「邦人渡支旅行禁止」を公布した。</li> <li>・5月14日皇軍慰問旅行の件について森主事が上京した。</li> </ul>

〔註〕『兵庫教育』に掲載された毎月の兵庫県教育会の会報、『兵庫教育』579号1938年1月15～613号、1940年12月15日の記事から整理した。

次に慰問の準備事項と慰問の手続きについて詳しくみてみよう。慰問の準備事項は、慰問帳の印刷、慰問品の募集、慰問映画の作製であった。慰問帳は、教員や子どもの慰問文を集めて編集したもので、慰問品は「県下の学校より寄せられたる生徒児童の作品手芸品慰問状」<sup>21</sup>であり、これを慰問袋に入れたもので、たとえば1938(昭和13)年には、約2000個の慰問袋が現地に持参された。

慰問旅行の手続きは次のとおりであった<sup>22</sup>。

- ・文部省に出張許可の手続き
- ・陸海軍省に慰問旅行の手続き
- ・身分証明書(所轄警察署発行のもの)
- ・天然痘、コレラ、チブスの予防注射の証明書(最近三ヶ月以内のもの)
- ・通貨百円札の搬出厳禁と一人千円以上(今は五百円)現金携行は為替管理法により海外の旅に許されぬことに留意
- ・乗船の際に通貨携帯高報告書、乗船申告書、身元申告書を作成して神戸水上署に提出すること
- ・写真報告の用意
- ・トーカー映写機、映画及撮影機並に普通写真機の搬出の証明書を神戸税関に於いて受けること。殊に映画については充分に研究選択を遂げること。

上記によれば、外務省が「邦人渡支旅行禁止」の方針を出したことにより、慰問旅行への制限が厳しくなったため、その手続きが煩瑣になった。具体的には、従来の旅行とは異なり、文部省と陸軍省への手続きおよび陸海軍省の承認が必要となり<sup>23</sup>、さらに各種の証明書の提出が義務付けられた。また軍に慰問許可を申請する際には、慰問旅行の目的、参加者の氏名、詳細な日程、旅費の予算をすべて明記することが求められた<sup>24</sup>。持参できる現金の金額にも制限が課され、その理由は、大蔵省が「上海方面に於ける円貨対策として又本邦外貨資金の節約乃至確保を図る」目的で、1939(昭和14)年7月に大蔵省令を改正し、外国旅行者の旅費携帯の限度を500円に引き下げたためであった<sup>25</sup>。

慰問映画の内容は、検閲されることを意識し、「充分に研究選択を遂げる」とされた。服装は「戦闘帽、国防色の軍服に近きもの」と指定され、出発前、県当局の訓示を受け、湊川神社参拝などを行ったと、従来までの旅行にはなかった特徴がみられた。

企画の際に重要であると考えられるのは人選であり、その詳細は表2のとおりであった。1938(昭和13)年の人選は兵庫県教育会の指名によって決定され、1939(昭和14)年と1940(昭和15)年の場合は、募集要項を出して、応募者のなかから兵庫県教育会の詮衡によって選出された<sup>26</sup>。この人選は日中戦争勃発までの旅行に比べると、次の2点の特徴があった。第1点は、小学校訓導の参加者数が増加したことである。日中戦争勃発までの計10回の旅行では、参加者107名のうち小学校訓導はわずかに3名であったが、今回の慰問旅行では、小学校訓導の数が急増した。この小学校訓導の「支那満鮮旅行」への派遣について、1936(昭和11)年に外務省対支文化事業部が文部省に依頼し、全国から2名小学校訓導を選び、一人つきに対し1000円を支給し派遣したことがある。その理由は、「これまで公費を以ての出張者は公立中等学校校長並びに教員、小学校長の範囲に限られ、

小学校では校長以外の教員はその恩恵に浴することできなかった。従って直接児童と接触をもつ教員の満洲国に対する認識が比較的不十分で、教育上遺憾の点が少くなかった」<sup>27</sup>からであった。つまり国は校長だけではなく、小学校訓導による「支那満鮮旅行」のメリットも配慮したことがわかる。日中戦争勃発後、兵庫県教育会のように小学校訓導が多く選ばれた理由は、興亜教育のために直接児童と接触する小学校訓導の大陸認識が重要であるという観点からの考慮であると考えられる。

第2点は、団長が「支那満鮮旅行」の経験者によって担当されたことである。森棟二は教育会の主事であり、これまで兵庫県教育会が実施した「支那満鮮旅行」において6回も団長を務めており、兵庫県教育会における「支那満鮮旅行」事業の担当者ともいえる人物であった。また、1940(昭和15)年の団長であった絹巻彦蔵は、1931(昭和6)年の旅行に参加したことがあり、しかもその翌年の兵庫県教育会では、知事の諮問案であった「時局ニ鑑ミ教育者ノ特ニ努力スベキ重点並ニ之ガ実行方案如何」の検討の際に、時局認識において「支那満鮮旅行」が有効であると主張した人物の一人であった<sup>28</sup>。ちなみにこの上記の二人は、紀元2600年を記念するために、1940(昭和15)年に開催された全国興亜教育大会の兵庫県の代表に選ばれた人物であった<sup>29</sup>。

表2 兵庫県教育会による「皇軍慰問支那満鮮旅行」の参加者一覧

年度	参加者	所 属	職名
1938年	森 棟二	兵庫県教育会	主事
	岡田良太郎	神戸尋常小学校	校長
	賀集富治	精道尋常小学校	校長
1939年	森 棟二	兵庫県教育会	主事
	酒井栄太郎	兵庫県立第一神戸高等女学校	校長
	平出真九郎	兵庫県立豊岡高等女学校	校長
	将積茂二	兵庫県武庫郡宮川尋常小学校	校長
	南野英磨	美囊郡志染尋常高等小学校	校長
	宮崎賢治	多可郡重春尋常高等小学校	校長
	長谷川寿一	赤穂郡御崎尋常高等小学校	校長
	小畑哲夫	川辺郡園田第一尋常高等小学校	訓導
	田中 薫	氷上郡鴨庄尋常高等小学校	訓導
1940年	南 正春	川辺郡立花第二尋常小学校	訓導
	絹巻彦蔵	加古郡加古川第一尋常高等小学校	校長
	橋本正三郎	尼崎市竹谷尋常小学校	校長
	東田正三	美囊郡淡河尋常高等小学校	校長
	船橋一雄	加古郡加古尋常高等小学校	校長
	山下元次	神戸市真陽尋常小学校	訓導
	横山義雄	西郷尋常小学校	訓導
	阿部 尚	荒田尋常小学校	訓導
	樋口繁一	多紀郡城北尋常高等小学校	訓導
中井哲彌	神戸市道場尋常小学校	訓導	

[註] 『兵庫教育』第590号、1939年1月15日、213頁、同第598号、1939年9月15日、82頁、同第610号、1940年9月15日、65頁～66頁より作成。

## 2 実施趣旨

次に、1938(昭和13)年から1940(昭和15)年の「皇軍慰問支那満鮮旅行」が、具体的にどのような趣旨によって実施されたのかをみてみよう。

## 1) 1938(昭和13)年——興亜教育の徹底

1938(昭和13)年に実施した慰問旅行の趣旨は、次のとおりであった<sup>30</sup>。

本会ハ今般中支北支ニ皇軍慰問使ヲ派遣シ親シク戦地ニ於ケル将士各位ノ辛勞ヲ稿フト共ニ大陸ノ建設的雰囲気ニ触レシメ以テ長期建設下ノ本県教育ノ振興ニ寄与セントスルノデアリマス

この記述からわかるように、慰問旅行は慰問を行うとともに中国大陸の情勢を知るといふ趣旨であった。そのほかには、帰国後の教員の感想によると、「日本教育者及学童の純情を支那良民学童に知らしめ以て東亜新秩序の建設は一に日支緊密なる提携親和にある所以を了解せしめ」<sup>31</sup>とあるように、日支提携が唱えたなかで、慰問旅行の目的は中国の事情を認識するだけでなく、日本の子どもの事情を中国の子どもに伝え、これによって「東亜新秩序の建設」の意義を中国側に理解させるという使命も負ったことがわかる。

このように兵庫県教育会が実施した慰問旅行は、「東亜新秩序の建設」に基づき、興亜教育のために行われ、この趣旨はその後も維持され、戦争の深刻化にともない、さらに強化されていった。

## 2) 1939(昭和14)年——興亜教育者たる資格を深めるため

1939(昭和14)年の趣旨は、次の記述から読み取ることができる。

東亜新秩序……その具現の力の偉大さは方(ママ)に世界の驚異である。それは絶大なる奮闘と犠牲とが払はれている言はばその結晶が興亜の聖業なのである。蓋しその実感は現地に行ったもののみが初めて深く銘記し得ることである。苟も現下教育の重職にあるもの須らく現地に行き来することである。時局のほんとうの姿は斯の如くにして認識せられることである。興亜教育者たる資格内容も斯くてこそ深められてゆく。本会はこの意味で県下教育実家十名を第二回皇軍慰問使として大陸に派遣したのである

これによると興亜教育のためという趣旨が継続され、慰問旅行をとおして軍の犠牲で獲得した興亜の成果を実感し、時局を認識することによって、興亜教育者としての資格を深めることが求められたのである。「支那学童にもあつて日本学童の純情を伝え皆に興亜教育にいそむべきことを語りあつた。一行は帰国後その生々しい実情を学校青少年学童並びに郷土一般につたえて時局の認識を深め、国精物動計画など国策遂行に協力邁進せしめむ」<sup>33</sup>という記述からわかるように、中国の子どもに日本の子どもの事情を理解させることにより、日支提携をはかるという目的と、日本内地に慰問先の様子を伝えることにより、時局への認識を深めさせるという二つの目的が継続されたのである。1938(昭和13)年の場合と比較すれば、国策遂行に協力するという決意が表れると同時に、その趣旨が深まったといえよう。

## 3) 1940(昭和15)年——総力戦の遂行

1940(昭和15)年の趣旨は、次のとおりであった<sup>34</sup>。

総力戦の遂行をなすべき態勢の確立と長期にわたる新東亜建設の爲には、国民一人々々がこの聖戦の目的貫徹に勇往邁進せねばならぬとは言ふまでもない……前線将兵各位に対し激励慰問を怠らないことは銃後戦士の一大責務であると思ふ

この記述からわかるように、皇軍慰問が教員の義務であるとされ、教員の身分は「興亜教育者」から「銃後戦士」へと変化し、慰問旅行は国策協力の一翼を担うようになったのである。

## Ⅲ 「皇軍慰問支那満鮮旅行」の実態

兵庫県教育会は、1938(昭和13)年に慰問旅行を開始したが、「種々の事情で発表しにくいものもあつて記録とせず、各地で行った三名のものが映画と講演とで報告をしたのである」<sup>35</sup>とあるように、報告書が残されていないため、慰問旅行の詳細は不明であり、現時点では慰問した地域だけを確認することができる。『兵庫教育』の1938(昭和13)年12月号の会報によると、「9月25日南嶺丸にて神戸出帆、河北察南晋北蒙疆連盟自治政府山東安徽江蘇浙江の各地に皇軍慰問をなし、上海より10月28日帰神。其の行程7800軒三十九部隊を訪ねた」<sup>36</sup>ことがわかる。一方『神戸新聞』の記事によると、「唐山に上陸して天津北京、包頭、済南、南京、上海」とあり<sup>37</sup>、これらの記録を総合してみると、慰問した地域は「北支中支南支」の軍事占領地であったことがわかる。以下、1939(昭和14)と1940(昭和15)年を中心に慰問旅行の実態について考察する。

## 1 1939(昭和14)年の「皇軍慰問支那満鮮旅行」の日程

表3は、1939(昭和14)年の慰問旅行の日程一覧である。これによると、慰問旅行のルートは、神戸→門司→上海→杭州→蘇州→無錫→南京→済南→北京→奉天→安東→平壤→京城→釜山→下関→神戸であった。このうち朝鮮を経由した理由は、京城で森棟二団長の弟から招待を受けたからであった。慰問の中心地は中国であり、いずれも軍事占領地であった所である。

見学場所を分類すると、史跡(21ヶ所)、戦跡(12ヶ所)、軍隊・病院(11ヶ所)、教育機関(8ヶ所)、官庁(2ヶ所)であった。見学場所のうち、史跡の見学数が最も多く21ヶ所であった。慰問とともに、軍用車を利用し、軍の保護のもとで多くの史跡を見学することができた。史跡が多かった北京、南京、蘇州、杭州では、軍隊、教育機関の訪問を終え、大半の時間を史跡見学に費やした。前述のように、軍は慰問旅行を制限しており、とりわけ「邦人渡支禁止」のなかで視察見学を目的とする旅行は禁止されており、そもそも史跡見学のための旅行は許されていなかった。しかし兵庫県教育会は、現地に到着した後、皇軍慰問という使命を達成しながら史跡見学も行っていった。それは戦跡の見学のすき間を縫って軍の案内によって行った場合もあれば、軍の都合で慰問が休止され、その時間を利用して見学した場合もあった。

では史跡見学の目的は何のためであったのだろうか。建前の理由としては、慰問旅行の趣旨に示されていたように、興亜教育者たる資格を獲得するため、大陸認識が重要であったからと考えられるが、軍や文部省が慰問旅行を奨励していなかったにもかかわらず、ほぼ2ヶ月分の給料<sup>38</sup>に相当する旅費を支払ってまで慰問旅行に参加し

表3 1939(昭和14)年の皇軍慰問視察旅行の日程

日付	視察先	発着	視察場所
5月25日	神戸	15:00発	湊川神社参拝
5月26日	門司	10:00着 16:00発	下関要塞司令部 内務省土木出張所 関門トンネル 阿彌陀寺 御陵赤間神社 春帆楼
5月27日	船中		
5月28日	船中		
5月29日	上海	11:00着	水平の母猿丸重野女史 海軍陸戦隊 慰問映画放映
5月30日	上海		海軍戦跡 開林公司 開北ペンキ会社 愛国女塾商学院 競馬場商務印書館 バスケットボール地帯 江湾鎮 北部地区方面戦没者之碑 南部地区方面戦没者之碑 八字橋戦地 大場鎮の忠霊塔 皇軍敵前上陸地記念塔 呉松砲台 倉永部隊長奮戦地白露橋 海軍特別陸戦隊病院 軍艦「いづも」 渡辺部隊
5月31日	上海		病院 憲兵隊 慰問映画放映
6月1日	上海	8:20発	
	杭州	13:05着	部隊 浄慈寺 岳王廟 清蓮寺 雲林寺
6月2日	杭州	8:20発	
	蘇州	13:20着	部隊 病院 寒山寺 虎丘禪寺 私立小学校 慰問映画放映
6月3日	蘇州	10:25発	
	無錫	11:25着	野戦病院 慰問映画放映
6月4日	無錫	不明発	部隊 市街
	南京	15:00着	自由見学 泥棒市場
6月5日	南京		部隊 市街 雨花台 光華門 記念塔 中山陵 明孝陵 紫金山 日本尋常高等小学校 領事館警察署長官舎 慰問映画放映
6月6日	南京	10:00発	車中
6月7日	済南	8:25着	日本領事館 部隊 新民青年訓練所 山東省立模範学校 大明湖 突泉 黒龍泉 前山東省政府庁 高華文化学院 済南事変忠魂碑 歴山 千佛山
6月8日	済南	朝発	
	北京	22:10着	
6月9日	北京		天壇 万寿山 部隊 北海公園 平生会館
6月10日	北京		部隊 通洲戦跡 金光学園 崇貞学園
6月11日	北京		文字山記念碑 孔子廟 国子監 ラマ廟
6月12日	北京	7:00発	車中
	奉天	22:50着	
6月13日	安東	4:04着	車中
	平壤	9:15着	通過
	京城	14:00着	森棟二の弟京城帝国大学教授理学博士森為三の出迎えを受け、話を聞く。
		22:25着 11:30発	船中
6月14日	下関	7:25着	
		8:50発	
	神戸	6:15着	

【註】『兵庫教育』第598号、1939年9月15日、80頁～135頁より作成した。

たということは、観光しようとしていた側面も否めないと考えられる。しかし軍は、観光の目的で教員を史跡見学に案内したわけではなく、「南京には明朗中支建設をめざして『中華民国維新政府』誕生し、北支新政権と提携の下に、民衆の楽土建設という大理想に向かってわが日本同胞の援助を求めている。山紫水明の古都南京は我が同胞と確りと握手の手をさしのべている」<sup>39</sup>といった記述に示されたように、日本人による占領地の発展を教員に認識させるため

あった。

戦跡は12ヶ所であり、すべて日中戦争の戦跡であった。なかでも上海は日中戦争の激戦地であるため、戦跡への訪問が最も多かった。戦跡への見学は軍の案内によって行われ、そこで軍から実戦談の講話を受けた。その次に、負傷兵士を慰問するため病院は必ず訪問する場所であり、その数は11ヶ所にもおよんだ。

教育機関についてみると、親日教育を行った私立小学校、愛国女

塾商学院、中華民国新民会が作った新民青年訓練所、宣撫工作を行う高華文化学院、山東省立師範学校など、かなり多岐にわたっており、いずれも親日教育にかかわる教育機関であった<sup>40</sup>。

官庁はわずかに2ヶ所<sup>41</sup>、そのうち南京で領事館警察署長官舎を訪問したのは、兵庫県人会主催の招宴に出席したためであり<sup>42</sup>、済南領事館への訪問は旅行上の手続きをするためであった<sup>43</sup>。これを同年に外務省対支文化事業部と文部省が協力して実施され、計34ヶ所の官庁を訪問し要人からの講話を受けていた「小学校教員満洲国及中華民国視察」<sup>44</sup>と比較すると、今回の慰問旅行では軍への慰問が中心となっており、官庁訪問は単に宴会に出席するあるいは手続きのため、重視されていなかったことがうかがえる。

このように、1939(昭和14)年の慰問旅行では、教員は慰問と興亜教育のための大陸認識という目的に基づき、史跡や戦跡、病院、教育機関などを訪れた。なお見学場所のなかで、南京では泥棒市場という興味深い場所もあった。そこを見学する目的は、「何れの所にも見ることの出来ない名物(?) (ママ)……支那人は盗むということなど当然の行為かのように考えているらしい。昨夜なくなった物も翌朝ここに来て見れば必ずある。そこで代価を支払って品物を受け取って帰るというのである。話によると子供や牛までが商品として出されていることもあるそうだ」<sup>45</sup>との感想に示されたように、「支那人は盗むということなど当然の行為かのように考えているらしい」という中国人観を確認するためであった。これも大陸認識のためであった。

## 2 1940(昭和15)年の「皇軍慰問支那満鮮旅行」の日程

1940(昭和15)年の慰問旅行の日程は、表4のとおりであった。そのルートは、神戸→下関→釜山→京城→清津→羅新→牡丹江→ハルピン→海拉尔→チチハル→長春→奉天→撫順→承德→大連→旅順→門司→神戸で、朝鮮を経て「満洲」への慰問が中心であった。

1940(昭和15)年に「北支中支」への慰問旅行が禁止されたため、すでに計画を立てていた兵庫県教育会は、やむをえず軍の指示に従い満洲駐屯軍への慰問を実施した。『神戸又新日報』には、「北満方面にも酷寒と戦いながら警備についている勇士も多数あり、この方面へもどしどし送ってほしいと当局で希望している」<sup>46</sup>との記述があり、国側が「満洲」への慰問を勧めたことがうかがえる。その理由は戦争の激化にともない、軍は「北支中支」への慰問がもたらした軍務上の支障を懸念したが、国民の慰問の情熱を安易に断ることができないことを考慮し、その視線を植民地統治が安定している「満洲」へ転移させようするためであったと考えられる。しかし「満洲」へ変更になったことを聞いて、慰問旅行をキャンセルした教員が出た。前述したように、教員はとくに戦地に行きたがっていたが、当時の「満洲」ではあまり戦闘が行われておらず、実際の戦場ではなかった。教員が慰問旅行をキャンセルしたことは、戦地へ行けなくなったことに対する失望感の表れであると考えられる。

朝鮮への訪問がルートに含められた理由は、総督府経営下の朝鮮の発展および、それが「満洲」の発展にとって意義があることを教員に認識させるためであった。たとえば清津については、「日本海中心主義の波に乗って、ここ二、三年の間に驚異の躍進振りを示している……日滿最捷徑路の要枢をなしている」<sup>47</sup>とあり、羅新については「鉄道は満洲国成立後、京図線の終点に決定し、港湾は

十四ヶ年、六千万円の総工費を以て九百万噸の吞吐能力を有する港湾計画の下に満鉄の手によって進捗している」<sup>48</sup>とあるように、朝鮮での見学場所は工業地や港湾での見学が重視された。その目的は「燃料報国の理想実現に邁進されている」<sup>49</sup>と、工業の発展が国策遂行のうえで重要であることを理解させるためであった。

一方「満洲」への訪問では、軍の要求に従って、満洲駐屯軍が集めていた北満洲各都市が主要な慰問先であった。次に各地への慰問にどのような目的があったのかをみてみよう。

まずハルピンは、「満洲事変後日本人の悲壮なるハル濱籠城、清水少佐の戦死、ハル濱郊外の激戦等数々のエピソードを残しハル濱が戦禍を免れて平静に帰するとともに、今度は北鉄を繞る満ソ葛藤は沸騰点に達し、一触即発の危機に瀕したが、日本の斡旋により北鉄を満洲国が買収することによって多年に亘る満ソ紛争の瘡は解消され且つソ聯勢力の総退却と共に北満の天地に始めて王道楽土の慈光は浴く輝き渡った」<sup>50</sup>と、ハルピンの平和と発展への日本の貢献を語っていた。

海拉尔は、「ノモンハン事件に於いて西部国境方面での軍事拠点として満洲里と共に重要性を有する」<sup>51</sup>軍事的要所であるとして訪問された。奉天は、1939(昭和14)年の慰問でも立ち寄ったが、それは朝鮮への経路として通過しただけであった。しかし1940(昭和15)年の慰問旅行では、「満洲事変の勃発、果敢なる皇軍の行動に、さしもの学良軍閥も没落して、王道満洲国の誕生となり、続いて昭和九年三月責阿列強環視の中に満洲帝国を創設、今日に及び文化的大都市としての形態も整い工業、経済、教育の中心として満洲の重要都市である」<sup>52</sup>との感想からわかるように、「満洲国」誕生後における奉天の発展の様子を見せるためにルートに加えられたのである。このように「満洲」の各都市を見学した理由は、軍を慰問するためだけではなく、「満洲国」建国後の発展ぶりを教員に認識させるためであった。

では、見学場所にはどのような特徴があったのだろうか。軍を慰問するため軍隊や病院、戦跡の見学が多く、そのほか史跡、教育機関、神社、官庁、資源地を見学したことは、前年度と同様であった。注目すべきことは、1940(昭和15)年の見学場所に、満蒙開拓青少年義勇隊が技能を習得する「満蒙開拓ハル濱訓練所(満蒙開拓青少年義勇隊ハル濱訓練所)」と「成吉干訓練所」が加えられたことである。満蒙開拓青少年義勇隊とは、「中国東北部を入植地として日本国政府が実施した移民の一形態」であり、彼らは「当該地域に対する日本の支配の基盤であった『満洲国』を受け入れ国として、一九三八年から一九四五年にかけて各道府県で公募され」<sup>53</sup>、「満洲」に派遣された後、現地の各訓練所で訓練を受けた。見学先であった「満蒙開拓青少年義勇隊ハル濱訓練所」の前身は、1932(昭和7)年に所長であった加藤寛治<sup>54</sup>が奉天の北大官舎の一角を借り、「皇軍の銃後を守り進んで満洲建国の礎となるは皇国の使命なり」というスローガンを掲げて作った国民高等学校の分校であり、1939(昭和14)年にはハルピンに移転され、前後約2000名の訓練生を受けたと説明された<sup>55</sup>。

訓練所を見学した教員は何を感じたのだろうか。満蒙青少年義勇隊に求められた資質は、身体の強健さ、簡素な生活に堪える習慣、大陸の広大さに負けない気魄であると、訓練所を見学した教員が感想を述べた<sup>56</sup>。さらに「今後青少年義勇軍の益々盛んに応募する

者の続出すること、並にその質の向上せんことの必要を痛感した次第である。それとともに今後学校教育上に大国民の錬成という点に多大の示唆を受けた様に感じた次第である」<sup>57</sup>と感想に示されたように、満蒙青少年開拓義勇隊訓練所を見学した目的は、1939(昭和14)年に拓務省が義勇隊の募集の不振を打開すべき方法を模索しは

じめた時期<sup>58</sup>において、教員に満蒙開拓青少年義勇隊にふさわしい青年の養成および派遣への協力を求めていたためであったといえよう。

表4 1940(昭和15)年の「皇軍慰問視察旅行」の日程

日付	視察先	発着	視察場所
5月25日	神戸	10:30発	湊川神社参拝
	下関	19:35着	
		22:30発	
5月26日	釜山	6:00着	市街一瞥
		7:05発	
5月27日	京城		朝鮮神宮 南山公園
		16:35発	国産燃研工業株式会社 総督府 昌慶苑 経学院 博文寺 寿松公立尋常小学校
5月28日	清津	9:02着	清津神社 高株山 漁港
		13:30発	
5月29日	羅新	18:00着	市内 港湾
	羅新	9:00発	
5月29日	牡丹江	20:30着	
	牡丹江	21:10発	吉本部隊 陸軍病院 山縣部隊
5月31日	哈尔滨	7:08着	市内 部隊 キタイスカヤ街 忠霊塔 志士の碑 孔子廟 ロシア寺院 博物館 松花江 満蒙開拓哈尔滨訓練所(満蒙開拓青年義勇隊哈尔滨訓練所)、成吉干訓練所
6月1日	哈尔滨	10:30発	車中
6月2日	海拉尔	6:35着	部隊 第二陸軍病院 第一陸軍病院 南屯 ラマ寺
		19:26発	
6月3日	チチハル	9:00着	部隊 チチハル神社 忠霊塔 日本人小学校、女学校
6月4日	チチハル	7:05発	
	哈尔滨	14:10着	市街
		16:45発	
長春	21:30着		
6月5日	長春	13:30発	新京神社 忠霊塔 寛城子戦跡 日本橋通 旧国務院 関東軍司令部 宮廷府 清真寺 大同広場 協和会館 南嶺戦跡 建国廟 安民広場 国務院 南新京 興安大路 大同大街
	奉天	17:09着	
6月6日	奉天		忠霊塔 同善堂 北陵 柳条溝 北大営 奉天城 市街
6月7日	奉天	9:30発	
	撫順	11:10着	古城子露天掘 大山炭鉱 表忠塔
		15:40発	
奉天	23:45発		
6月8日	承德	19:30着	忠霊塔
6月9日	承德	11:10発	ラマ寺 部隊 離宮
6月10日	奉天	6:00着	
		7:00発	
	大連	13:30着	油房 埠頭 広場 大連神社 忠霊塔 露天市場 満洲資源館 浪速町連鎖商店街
6月11日	大連	9:00発	
		10:00着	
	旅順	15:30発	納骨寺 表忠塔 博物館 記念館 東鶏冠山北堡壘 203高地
大連	16:30着		
6月12日	大連	11:00発	船中
6月13日	船中		
6月14日	門司	6:00着	
		13:00発	自由見学
6月15日	神戸	8:00着	

[註] 『兵庫教育』第610号、1940年9月15日、67頁～88頁、同第611号、1940年10月15日、47頁～68頁より作成した。



### 3 慰問活動および軍の対応

前述したように、兵庫県教育会は軍の指示にしたがって慰問文、慰問袋の贈呈、トーキー映画の放送、病院を訪問するという形で慰問の準備を行った。では現地に到着後、教員たちはどのような慰問活動を行ったのだろうか、またそれに対して軍側はどのように対応したのだろうか。

まず教員たちの慰問活動をみてみよう。表5によると、教員は軍に慰問の挨拶を述べ慰問品を贈呈し、病院で傷病兵士を見舞い、慰問映画を放映する形で慰問を行った。1939(昭和14)年には、計部隊10ヶ所および病院1ヶ所を訪問し、子どもたちの手芸品および慰問文を入れた慰問袋が各部隊に贈呈された。

表5 皇軍慰問活動一覧

日付	都市	軍との関わりの実態
1938(昭和13年)		
	北支	
	中支	学校から集めた慰問袋2000余を140に納めて携行した。トーキー映画を持参して各地部隊で慰問映画会を開いたり、また兵士の姿を撮影して郷土家族たちへのお土産とした。
1939(昭和14年)		
5月29日	上海	陸戦隊を訪問し副官海軍大尉、海軍中将閣下に面謁し慰問の挨拶を述べ松の一鉢を贈った。午後6時陸戦隊から迎えを受け、8時から10時まで慰問映画の放映を行った。部隊より感謝状を頂いた。
5月30日	上海	海軍陸戦隊第〇大隊第〇〇中隊を訪ねて、海軍特務中尉に面謁した。海軍武官府上海復興班に海軍大佐、再び海軍陸戦隊を訪ね海軍特別陸戦隊司令官に面謁し、一同撮影を行った。午前11時、海軍陸戦隊の車で一列の戦跡案内を依頼した。午後2時30分軍艦「いづも」に司令官を訪ね、不在のため副官より戦況を聴取した。午後3時20分山下軍曹の案内で戦跡見学し、戦況を聴取した。午後8時半渡部部隊に行った。
5月31日	上海	9時49分病院に傷病兵を見舞った。午後1時憲兵隊を訪ねた。1時30分〇〇艦に司令官を訪ねた。夜呉松〇〇部隊に慰問映画を放映した。
6月1日	杭州	車中で討伐出動の部隊に会って慰問挨拶を述べた。午後1時ごろ部隊を訪問慰問品贈呈、慰問挨拶を述べ、部隊長の答礼があった。軍隊の厚意で第一線歩哨の線まで慰問視察を行った。
6月2日	蘇州	〇部隊を訪問。軍用トラックで寒山寺などを見学。夜軍部の出迎えを受け野戦病院で慰問映画会を開催した。
6月3日	無錫	11時駅で部隊の上野曹長の迎えを受け、軍用自動車で野戦病院を見舞った。午後2時から無錫大院内で約3時間の慰問映画会を開催した。
6月4日	無錫	〇〇部隊本部を慰問した。
	南京	軍の自動車隊の出迎えを受けた。特務機関本部情報班長の案内で泥棒市場見物を行った。
6月5日	南京	軍の自動車で〇〇部隊訪問、慰問文贈呈した後、戦跡史跡見学を行った。
6月6日	浦口	軍の斡旋で乗船、救命具を受けた。浦口に上陸し、司令部を訪問し部隊長が駅まで送る。
6月7日	済南	〇〇部隊を訪問し参謀より2時間の講話を拝聴した。午後3時10分軍用車で戦跡、主要地方を見学した。
6月8日	北京	清華大学にある部隊を訪問した。
6月10日	北京	部隊訪問、副官より戦況講話を受け戦跡見学を行った。
6月11日	北京	軍用自動車で準尉の案内で芦溝橋戦跡見学を行った。
1940(昭和15年)		
5月29日	牡丹江	駅で吉本部隊出迎えを受けた。
5月30日	牡丹江	軍用自動車で旅館まで迎え、吉本部隊訪問、少佐より戦況を聴取した。尾高部隊を訪問した。陸軍病院を訪問する。山縣部隊を訪問した。夜古川中佐の招待で当地一流の料亭で支那料理の招宴を受けた。
6月2日	ハルピン	駅で部隊副官の出迎えを受けた。部隊を訪問した。第一、第二陸軍病院を訪問した。
6月3日	チチハル	部隊参謀の旅館までの出迎えを受け、司令部を訪問した。
6月8日	承德	駅で福井部隊の迎えを受け、忠霊塔を参拝した。

[註]『兵庫教育』第595号1939年6月15日、同第598号1939年9月15日、同第610号1940年9月15日、同第611号1940年10月15日より作成した。

映画の放映は重要な慰問事項であり、1939(昭和14)年の慰問映画の内容は、「漫画箱根山宝塚少女歌劇レビュー、赤城山」を撮影したもので<sup>59</sup>、上海、蘇州、無錫で1回ずつ放映された。次に1939(昭和14)年5月29日の上海における海軍陸戦隊での映画会開催の様子をみてみよう。

当日、映画会は午後8時から10時まで約2時間行われた。まず海軍中佐より開会の挨拶があり、次に兵庫県教育会の代表から慰問の挨拶並びに開催の趣旨を述べた後、放映を開始した。最後に教育会の

代表者が「日本海軍万歳」を三唱し、海軍中佐が閉会の辞を述べ、感謝状を贈呈するという流れであった。

では兵士たちは、この慰問品や慰問映画をどのように受け止めていたのだろうか。旅行記によると、「小学生の書いた可憐な慰問文が奪い合いで歓迎されて兵隊さん達が通信に飢えていることを痛感しました」<sup>60</sup>、「今回持参の慰問文も残り少なくなった。中には有蓋貨車に乗り込んで第一線に出発する兵隊さん等に渡すと大喜びで暑い所で頭を集めて読んで居られる」<sup>61</sup>と、慰問映画が「大喝采」

され<sup>62</sup>、兵士たちが喜んで受け入れていたことが伝えられた。しかし後述するように、他方では商品化された慰問品や印刷された慰問文が部隊に携行されたこともあり、必ずしも旅行記に記録されたように兵士に歓迎されたわけではなかった。

次に、教員に対する軍の対応をみてみよう。軍は教員の送迎、招待、見学場所の案内および講話を行った。まず送迎については、1939(昭和14)年6月3日と6月4日は無錫で、1940(昭和15)年5月29日は牡丹江、6月2日はハルピンで、6月8日は承德で軍隊から駅まで出迎えを受けた。1940(昭和15)年5月30日の牡丹江では、軍人からの招待で当地一流の料亭で中華料理の招宴を受けた。病院への見舞いや戦跡見学などはすべて軍用車が使用された。教員は「軍隊には成るべく御厄介をかけぬ様にして只慰問の使命を十二分に果たすことに専念したい」<sup>63</sup>と意識していたにもかかわらず、実際は教員に対応するため

軍はかなりの時間を費やしたことがうかがえ、軍が慰問旅行へ制限を課した理由がここからもうかがうことができる。

軍から受けた講話の内容は、実戦談や時局の状況のほかには、宣撫工作に関するものであった。たとえば杭州にある部隊長から「浙江省……抗日思想強烈で共産軍多く、日本に反抗一番強烈な地であるが、又一方皇軍の努力により一般人民を愛撫して適正な指導を成しつつあり。戦争で荒れた所の良民に生業の物資を与える」<sup>64</sup>と抗日思想を取り除き、軍による宣撫工作の成果に関する講話を受けた。済南のある部隊の参謀からは、「支那大陸の模様と皇軍苦心活動せる状況、良民宣撫工作と教育現状と将来のとるべき途」<sup>65</sup>についての講話を受けた。このなかで宣撫工作についても説明され、軍は慰問旅行をとおして、宣撫工作に対する教員の協力を求めていると考えられる。

表6 1938(昭和13)年の「皇軍慰問支那満鮮旅行」報告会一覧

日付	時間	会場	参加者	人数
1月23日	13:00~17:00	福崎高女講堂	神崎郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	600余
1月24日	13:00~17:00	和田山南座劇場	朝来郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	600余
1月25日	13:00~17:00	八鹿劇場	養父郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	500余
1月26日	19:00~23:00	弘道館小学校講堂	出石郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	500余
1月27日	10:00~12:00	豊岡小学校講堂	豊岡小学校生徒	不明
	13:00~16:30		城崎郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	800余
1月28日	13:00~17:00	浜坂町劇場	美方郡教育会員同婦人会員郡内出征遺家族等	不明
	19:00~22:00	美方郡大庭小学校講堂	大庭村出征将士遺家族並び一般	不明
2月1日	19:00~22:00	多可郡中町第一小学校講堂	中町出征将士遺家族並び一般	不明
2月2日	13:00~15:00	多可郡杉原谷小学校講堂	同校児童	不明
	19:00~22:00	多可郡野間谷第一小学校講堂	野間谷村出征将士遺家族並び一般	不明
2月3日	13:00~15:30	多可郡日野小学校講堂	日野村出征将士遺家族並び一般	不明
	13:00~15:30	多可郡松井荘小学校講堂	松井荘村出征将士遺家族並び一般	不明
2月4日	13:00~16:00	多可郡比延第一小学校講堂	比延村出征将士遺家族並び一般	不明
	19:00~22:00	多可郡黒田荘第一小学校講堂	黒田村出征将士遺家族並び一般	不明
2月8日	10:00~16:00	龍野商業学校講堂	同校生徒	不明
2月14日	10:00~15:30	神戸市兵庫高等小学校	同校生徒	約3000
2月15日	9:00~16:30	武庫郡大荘小学校	同校及青年学校生徒	2800
2月17日	13:30~16:30	川辺郡園田第二小学校	同校生徒及校下出征将士遺家族	不明
	18:00~22:00	武庫郡精道小学校	同校父兄並出征将士遺家族	不明
2月18日	9:00~12:00	武庫郡精道小学校	同校児童生徒	不明
2月20日	12:00~16:30	三原郡賀集小学校	同校児童青年学校父兄	不明
	19:00~22:30	三原郡福良町公会堂	出征将士遺家族	不明
2月21日	12:30~17:00	三原郡阿那賀小学校	同校児童青年学校村民一般	不明
	19:30~21:30	三原郡湊小学校	同校児童生徒青年学校生徒	不明
2月22日	14:00~17:00	三原郡倭文小学校	同校生徒出征将士遺家族	不明
	19:00~22:30	三原郡堺小学校	教育会員及出征将士遺家族	不明
2月23日	13:00~16:30	三原郡市村公会堂	同郡女子青年団員	不明
3月3日	19:00~21:00	神戸市葺合青年学校	同校生徒	不明
3月4日	14:00~17:00	武庫郡岩園小学校	同校児童及校下婦人会員	不明
3月7日	13:00~16:30	県立北條高等女学校	校下出征将士遺家族及生徒	不明
3月10日	19:00~22:00	赤穂郡高田小学校	出征将士遺家族及児童生徒	不明
3月11日	10:00~15:00	加古郡加古川第一小学校	児童生徒	不明
3月15日	14:00~17:00	川辺郡小浜小学校	児童生徒	不明
3月16日	13:00~16:30	川辺郡小浜小学校	出征将士遺家族	不明
	19:00~22:30	川辺郡東谷小学校	村民一般及児童生徒	不明
3月17日	19:00~21:00	川辺郡中谷小学校	児童生徒	不明

〔註〕『兵庫教育』第592号、1939年3月15日、151頁、同第593号、1939年4月15日、137頁より作成した。

### Ⅲ 「皇軍慰問支那満鮮旅行」の成果と限界

#### 1 戦場と銃後をつなぐ媒介としての効果

既述のとおり、教員は映画をとおりて銃後の様子を兵士に伝えていた。しかし慰問の使命はこれで終わるのではなく、帰国後に撮影した映画や講演会をとおりて、戦地の様子を銃後の国民に伝えており、慰問旅行は銃後と戦地をつなぐ媒介としての役割を有していたのである。

1938(昭和13)年の慰問旅行を終えた後、参加者であった兵庫県教育会主事の森棟二、神戸尋常小学校長の岡田良太郎、精道尋常小学校長の賀集富治は、映画会と講演会をとおりて、慰問旅行で見聞した内容を報告しており、前頁の表6はその講演会開催の状況を整理したものである。

これによると報告会は27日間、県下14郡にわたって計34カ所で行われた。参加者は、出征将士遺家族を中心に教育会員、婦人会員、小学校青年学校の生徒およびその保護者、一般村民、青年団員などであった。参加者数に関する正確な数値が不明であるが、表6をみるかぎり、数百人程度の参加人数がつねに存在していたと考えられる。映画会を開催するには、国歌合唱、遙拝、黙禱、映写、閉会の流れで行うことが義務づけられており、「但皇軍慰問報告談及映画を必要の場合は黙禱の次に行うこと」とされた<sup>66</sup>。

1939(昭和14)年の『兵庫教育』6月号の「会報」には、「五月九日 皇軍慰問使報告会開催につき武庫郡宮川小学校増谷高等女学校に森主事出張」<sup>67</sup>とあり、1939(昭和14)年度の慰問旅行が終了した翌年の5月になっても報告会が続けて開催されていたことがわかる。このように3名の教員は多くの団体の申込みに応じ、大規模な講演をして慰問旅行の報告をしていたのである。

では、その教員たちはその報告会で何を伝えたのだろうか。講演会に関する報告書や放映された映画は不明だが、「東亜新秩序の建設は一に日支緊密なる提携親和にある所以を了解せしめ、又帰国後は機会ある毎に各地に報告会を開きて時局に対する国民の認識銃後報国の精神を一層強調する等次代国民の教養に寄与せん」<sup>68</sup>との感想からうかがえるように、「東亜新秩序の建設」の国策および時局の状況を伝え、国民の愛国心を促していたことが確認できる。また「撮影機を持参して郷土軍士の元気な姿を撮影し其の家族へのお土産とした」<sup>69</sup>という記述からわかるように、教員は慰問旅行をとおりて兵士たちの様子をその家族に伝えていた。

また教員は現地で兵庫県出身の兵士に会い、彼らから家族や知人への手紙や伝言などを託されたことがあった。1938(昭和13)年の慰問旅行の際に、森棟二団長は、現地で皇軍慰問使の腕章をみた神戸市に知り合いがいる兵士から「兵庫県のお方か、帰ったら神戸の何某にどうか直しく伝えてくれ」と声をかけられた<sup>70</sup>。また「中支の〇〇隊の伍長菅原惣助氏」から「神戸林田区の松本ことえ様、同佐野信子様のおききは事変下婦人の亀鑑ともいふべきお方」<sup>71</sup>への手紙を受け取ったともあった。その後、森は兵士から託されたように、帰国後にその二人を訪ね手紙を渡した。このように慰問旅行は、時局や国策を国民に伝えるだけではなく、戦場の状況を兵士の家族および国民に伝えるという役割も果たしていたのである。

しかし他方では、「天津を少し過ぎた頃、各人の預かって居る郷土出身の兵隊さんから託された手紙を車中乗込の憲兵の取調べが

あった」<sup>72</sup>とのように、教員が日本に持ち帰った手紙は検閲されたものであり、兵士は家族へ本音を伝えることができなかった。皇軍慰問の道具とも言える慰問袋は、井上寿一が指摘したように、「銃後の日本社会と前線の兵士たちをつなぐ、ほとんど唯一のコミュニケーションの手段」<sup>73</sup>であったと同時に、国家が「銃後を戦争に動員するために、慰問袋を政治的手段として、利用していた」政治的な機能を有するものでもあった<sup>74</sup>。

#### 2 慰問旅行の限界

慰問旅行が果たした役割を明らかにするには、教員が部隊に持って行った慰問袋・慰問文に言及しなければならない。前述したように、教員が持参した慰問品や慰問文が、兵士に歓迎されたと旅行記には記録されたが、実際はどうであったのかをみてみよう。

まず慰問袋について、井上寿一は、「戦争景気は沸く銃後は、高価な慰問袋を送ることが可能となった。その結果、『慰問』の気持ちさえ金で買うことができた。前線の兵士たちの銃後に対する不満や不信は、確実に高まっていく」<sup>75</sup>と述べ、慰問袋には負の側面があると指摘した。また町田忍『戦時広告図鑑 慰問袋の中身はナニ?』(WAVE出版、1997年)によると、当時はお菓子、薬、日用品などさまざまな業者が慰問袋を生産し、それを宣伝の手段として利用していたことがわかる。このように商品化されていた慰問袋が当時多く存在していたことがわかる。

兵庫県では『神戸又新聞日報』には商品化された慰問品や印刷された慰問文が部隊に届けられたと、慰問品の問題点が報道された<sup>76</sup>。さらに商品化された慰問袋に対して、「軍当局の希望を中心として慰問袋の改良充実を図ることになり、このほどその主旨を県下各市町村長、学校長に通達するとともに三百万県民の協力を求めることになった」<sup>77</sup>と記されたように、兵庫県は軍の希望を受け、慰問袋の改善を県民に呼びかけていた。慰問袋に対し、兵士たちは具体的にどのように反応したのか、軍事機密の観点から、兵士の本音は旅行記に反映されることができないため、それを知ることは難しいが、上述の商品化した慰問袋が氾濫した状況および慰問袋の改善も呼びかけられていたことを考慮すると、慰問袋が十分な効果を果たしていたとはいえない。少なくとも慰問袋は、必ずしも旅行記に記録されたように兵士に歓迎されたとはいえず、負の側面が存在していたと考えられる。

また慰問旅行に参加した兵庫県の教員は、帰国後「現地の兵隊さんに何を贈ったら一等喜ばれるか、食物でもない、シャツでもない、結局は手紙である……その手紙でも郷里の模様が細大となく分かるものが一等喜ばれる……学校の生徒や婦人処女会の方々にぜひ同郷出征将兵への御手紙を一本でも多く出していただきたい」<sup>78</sup>と、慰問文の贈呈について提言をしていたこともあった。この記録は教員の慰問袋に関する提言であったとともに、教員が慰問先で学んだことを旅行記によって日本国内に伝えたことも確認することができる。教員の提言によると、郷土の様子を伝える慰問文が兵士に喜ばれたようであったが、実際兵士に届けられた慰問文はどのようなものであったのかをみてみよう。

1938(昭和13)年の慰問の際、教員は軍に「県下各市郡教育会及各学校よりの慰問文並びに銃後の実践事項美談<sup>79</sup>」をまとめた皇軍慰問帳を600冊<sup>80</sup>贈呈した。この慰問帳については、『兵庫教育』第

584号で「皇軍慰問特輯号」という特集が組まれた。それによると慰問帳は、教育会、専門学校、師範学校、中学校、高等女学校、実業学校、都市立学校の教員らによる合計123編の慰問文を編集したものであった。慰問文の内容をみると、千篇一律で「我が帝国は東洋平和の為暴支膺懲の聖戦を進められ、「皆様の御苦闘御功績こそは一億国民が永劫感謝してやまい……私達は日夜心を戦場に馳らせて、ひたすら御武運の長久をお祈り申し上げます」、「国歌総動員の秋、老若男女を問わず銃後の後援に奮い立ち各種団体の目覚しき活躍、涙ぐましき美拳の数々枚挙に遑ありません……諸氏の御家庭に於かれましても、よく出征軍人の家族としての本分を守られ、いとも健気に留守宅の務を全うしていられることを御知らせして御安心願ひ度い」と、「暴支膺懲の聖戦」という国が作った戦争の目的、兵士への感謝、銃後国民および出征兵士家族の奮闘の様子を綴る文章であった<sup>81</sup>。慰問文の中には郷土の事情を伝えたものであったが、それは銃後の美談ばかりであった。このような決まり文句ばかりの慰問文は、兵士にとって本当に慰問の効果を有していたのかは、疑問である。

一方、児童生徒の慰問文はどうであったのだろうか。教員は、現地である将校から「児童生徒の作品は支那人を憎む書振りが相当に多いこれは大に考えものである。学校でもっと日支提携を教えてもらいたい<sup>82</sup>」と、子どもの慰問文の問題に関する意見を聞いており、他の兵士からも同じような感想を聞いていた。日清戦争後、蔑視的な中国観が日本社会に広がり、それは教科書などを通じて子どもたちにも浸透していた。しかし占領地における宣撫工作の需要のため、このような蔑視観を取り除くことこそ軍の要望であった。しかし子どもたちの慰問文には中国人を憎む記述が多く、その内容は宣撫工作に取り組んでいる軍にとっては不都合だったのである。教員たちは軍人の話からこの情報を聞き、日本に持ち帰った。さらに旅行記でこれを報告して兵庫県の教員やその他の読者に伝達し、慰問文の内容を改善するよう訴えた。このように慰問旅行は、慰問文の改善をとおして、兵庫県内で行われていた中国人に対する蔑視的な教育を、部分的に改善する可能性をもたらしたといえるであろう。しかしそれはあくまで軍の意向であり、宣撫工作の一環という限界を超えるものではなかった。

## V おわりに

本論文では日中全面戦争勃発後において、兵庫県教育会が実施した「慰問旅行」について、以下の4点を明らかにした。

第1点は、軍や文部省の慰問旅行への制限を乗り越え、兵庫県教育会が慰問旅行を積極的に実施したことである。慰問旅行を実現することができた理由は、兵庫県教育会が慰問旅行の準備段階において、すべて軍の要求にしたがったためであった。慰問旅行の趣旨は、慰問を行うとともに、国策であった「興亜教育」に協力するためであり、これは「地域ボス支配の道具として翼賛団体」<sup>83</sup>という側面をもつ戦前教育会の性格にもよると考えられる。

第2点は、1939(昭和14)年と1940(昭和15)年の慰問旅行の日程の特徴を明らかにしたことである。前者の場合は、慰問旅行でありながらも軍から便宜を受け、多くの史跡を見学することができた。後者の場合は、満蒙青少年義勇隊訓練所への訪問を新たに加えており、

その目的は、義勇隊派遣に対して教員の協力を求めたためであったと考えられる。

第3点は、教員と軍とのかかわりの実態を解明したことである。教員が慰問品を贈呈し、慰問映画を放映したことは兵士たちに喜ばれたことが旅行記に記録された。他方では教員に対応するために、軍がかなりの時間や精力を費やしていたこともわかった。

第4点は、慰問旅行が果たした役割を明らかにしたことである。教員は銃後の様子を兵士たちに伝えたとともに、帰国後は講演会などをとおして前線の状況を銃後の国民に伝えていた。つまり慰問旅行は、銃後と前線をつなぐ媒介としての役割を果たしたのである。

第5点は、教員たちが慰問旅行をとおして、中国に関する教育のあり方についての情報を持ち帰っていたことである。具体的には、軍は子どもたちの慰問文の中に中国人を憎む記述が多いことを、宣撫工作の支障になるとして憂慮しており、教員たちは軍人の講話をとおしてこの情報を摂取し、日本に持ち帰った。さらに旅行記を媒介として広く兵庫県の教員に報告し、慰問文の改善を訴えた。このように慰問旅行は、兵庫県内で行われていた中国人に対する蔑視的教育を部分的に改善する可能性を持っていたが、それはあくまで軍の宣撫工作の一環という限界をもっていた。

今後の課題として、以下の2点を示しておきたい。第1点は、報告書には、兵士たちが国家のために尽力していることしか伝えられていなかったが、実際に現地で日中双方の戦死者など、戦争の悲惨な一面も見ただけである。教員が、それをどのように受け止めていたのか、また教育現場でどのように子どもたちに伝えたのだろうか。第2点は、子どもたちの慰問文は教員の指導のもとで綴られたものであり、子どもたちの本音を反映するものではなかった。実際に子どもたちは何を伝えたかったのか、どのように戦争を理解していたのか、今後関連する資料の発掘と解明することが、慰問旅行の役割を解明するうえで重要であると考えている。

- 1 時代の変遷、視察地の相違によって、「満韓旅行」、「満鮮旅行」、「鮮満旅行」、「満蒙旅行」、「満洲国中華民国旅行」などさまざま呼ばれたが、本稿では統一して「支那満鮮旅行」と呼ぶことにする。
- 2 渡部宗助「中学校生徒の異文化体験——1906(明治39)年の『満韓大修学旅行』の分析」『国立教育研究所研究集録』21、1990年、高媛「戦前における『満洲』への修学旅行」『国際日本学シンポジウム報告書 国際日本学の可能性』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2003年、鈴木普慈夫「満韓修学旅行の教育思想的考察——教育目標の時代的变化の一例として」『社会文化史学会編『社会文化史学』第48号、2006年3月、伊藤健策「戦時期日本学生の修学旅行と『朝鮮』認識」『国史懇話会雑誌』46号、2006年10月、長志珠絵「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場——女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年。
- 3 教育会に関する主要な先行研究をあげると、渡部宗助『府県教育会に関する歴史的研究』文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書、1991年3月、梶山雅史編著『近代日本教育会史研究』日本図書センター、2007年がある。

- 4 拙稿「1906（明治39）年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』第1巻第2号、2008年。
- 5 『兵庫教育』第493号、1928年11月15日、63頁。
- 6 『兵庫教育』第466号、1928年8月15日、2頁、「今回決行した海外視察は本県最初の試みであって随分思い切った大きな企であった。
- 7 『兵庫教育』第610号、1940年9月15日、64頁。
- 8 『教育週報』第706号、1938年11月26日付。
- 9 『兵庫教育』第595号、1939年6月15日、81頁。
- 10 註8)に同じ。
- 11 『兵庫教育』第601号、1940年9月15日、64頁。
- 12 『兵庫教育』第579号、1938年1月15日、41頁。
- 13 註8)に同じ。
- 14 『兵庫教育』第598号、1939年9月15日、84頁。
- 15 註14)に同じ。
- 16 管見のかぎり、1939（昭和14）年の教育界で員を対象とする主催団体は、外務省対支文化事業部、帝国教育会、全国小学校連合女教員会、神奈川県、富山県、京都府、山口県などの地方教育会であった。
- 17 『兵庫教育』第593号、1939年4月15日、148頁。
- 18 註17)に同じ、巻頭。
- 19 註14)に同じ。
- 20 『兵庫教育』第600号1939年11月28日、105頁。
- 21 註20)に同じ。
- 22 『兵庫教育』第598号、1939年9月15日、85～86頁には全12項目が掲げられていたが、紙幅の関係で、重要な項目だけを取り上げた。
- 23 註11)に同じ、65頁。
- 24 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref: C 04014759700（第1013～1021番目の画像から）「昭和14年7月『壺大日記』」「皇軍慰問並大陸視察許可の件」、陸軍省大日記、防衛省防衛研究所。
- 25 『満支旅行年鑑』ジャパ・ン・ツーリスト・ビューロー、1940年、191頁。
- 26 註17)に同じ、巻頭。
- 27 『教育週報』第588号、1936年8月22日付。
- 28 『兵庫教育』第518号、1932年12月15日、130・131頁。
- 29 『兵庫教育』第609号、1940年8月15日、81頁。
- 30 註17)に同じ、巻頭。
- 31 註20)に同じ。
- 32 註14)に同じ、81頁。
- 33 註14)に同じ、81頁。
- 34 註11)に同じ。
- 35 註14)に同じ、158頁。
- 36 『兵庫教育』第589号、1938年12月15日、124頁。
- 37 『神戸新聞』第14682号、1938年10月29日付、「慰問文引き張り 兵庫県教育会の皇軍慰問使昨日神戸に帰る」という大きな見出しで兵庫県教育会の「皇軍慰問視察旅行」を報道した。
- 38 1939年の兵庫県における小学校本科正教員男性の平均月給は、85604円（『大日本帝国文部省第六十七年報』文部省総務局調査科、1939年4月～1940年3月、下巻65頁）であり、250円の旅費のうち、兵庫県教育会が100円を補助し、残りの150円は自費であった。
- 39 註14)に同じ、109～110頁。
- 40 註14)に同じ、105頁。
- 41 前山東省政庁は韓復矩の自爆の場所であり、官庁として扱わない。
- 42 註14)に同じ、112頁。
- 43 註14)に同じ、115頁。
- 44 第一回小学校教員満洲及支那視察報告』1940年、JACAR（アジア歴史資料センター）、Ref:B05015710100（第二一四番目の画像から）「本邦人満支視察旅行関係雑件／補助実施関係 第十四巻」「文部省囑託 武本保外小学校教員二十名 昭和十四年十月 分割2」、外務省記録、外務省外交史料館、旅行日程より整理した。
- 45 註14)に同じ、109頁。
- 46 『神戸又新日報』第19033号、1940年3月24日付。
- 47 註7)に同じ、71頁。
- 48 註7)に同じ、72頁。
- 49 註7)に同じ、70頁。
- 50 註7)に同じ、77頁。
- 51 註7)に同じ、85頁。
- 52 『兵庫教育』第611号、1940年10月15日、53頁。
- 53 白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史』北海道大学出版会、2008年、1頁。
- 54 「満洲」の開拓事業に力を注いだ加藤完治だと思われるが、引用した『兵庫教育』第610号の80頁には「加藤寛治」と表記されており、資料の文脈からみると「加藤完治」の誤植であると考えられるが、同一人物か否か十分な証拠がなかったため、資料のまま引用した。
- 55 註7)に同じ、81～82頁。
- 56 註7)に同じ、83～84頁。
- 57 註7)に同じ、83～84頁。
- 58 註53)に同じ、134頁。
- 59 註14)に同じ、93頁。
- 60 『神戸新聞』第14682号、1938年10月29日付。
- 61 註14)に同じ、122頁。
- 62 註14)に同じ、122頁。
- 63 註14)に同じ、85頁。
- 64 註14)に同じ、100頁。
- 65 註14)に同じ、115頁。
- 66 『兵庫教育』第597号、1939年8月15日、160頁。
- 67 註7)に同じ、130頁。
- 68 註20)に同じ。
- 69 『兵庫教育』第588号、1938年11月15日、99頁。
- 70 註14)に同じ、132頁。
- 71 註14)に同じ、132頁。
- 72 註14)に同じ、122頁。
- 73 井上寿一『日中戦争下の日本』講談社、2007年、28頁。
- 74 註73)に同じ、31頁。

- 75 註73)に同じ、35～36頁。
- 76 『神戸又新日報』第19033号、1939年3月24日。
- 77 註76)に同じ。
- 78 註14)に同じ、125頁。
- 79 『兵庫教育』第587号1938年10月15日、116頁。
- 80 『兵庫教育』第589号、1938年12月15日、124頁。
- 81 註14)に同じ、77～78頁。
- 82 註14)に同じ、125頁。
- 83 渡部宗助『府県教育会に関する歴史的研究』文部省科学研究費  
(一般研究C)研究成果報告書、1991年3月、3頁。

